ガリシア語の人称代名詞を文法地理学的に見る

O pronome persoal do galego na xeo-gramática

浅　香　武　和

Takekazu ASAKA

0．言語地理学は、これまで、主として音韻現象、語彙を対象とすることが多かったが、文法的事実についても種々の問題があげられる。筆者は、浅香（1988）において、ガリシア語の音韻現象および語彙について考察した。本稿では、引き続いて、とくに人称代名詞を中心とする文法的事実を言語地理学的に検討を加えたい。

0．1　ガリシア語の地理的多様性

ガリシア語には「標準語」という概念がなく、標準語に対する柔軟性はきわめて大きい。ガリシア語が標準化（規範化）するに容易でない言語的事実の状況のなかで、ＩＬＧ－ＲＡＧ[1]による規範化された形態かあるが、それを受け入れようとしない理由はどこにあるのであろうか。ガリシア語を話す人びとには特定の方言にもとずく明瞭な規則はなく、事実、ガリシア語の「方言」を使用するという意識はきわめて薄いと言えよう。一般に、「セセオ」と「ヘアーダ」のような音声的特徴を別として、話しことばのあいだでは語彙の差異がかなり大きい。[2]このことはガリシア語の多様性を意味していると言える。この多様性に注目し、18世紀後半にサルミェント神父とソブレィア神父による語彙学の研究が始まった。つぎに続く、文学史上ガリシアの「ルネッサッス」と呼ばれる時代の黎明期に、ガリシア地方のことばを初めて区画したサコ・エ・アルセ（1868）は北部と南部に区画した。その後、１世紀ほどしてサモーラ・ビセンテはガリシア語の方言学をうちたて、ガリシア語を東部（大陸側）と西部（大西洋側）に画定した。さらに、カルバーリョ・カレロ（1973）はサモーラ・ビセンテの区画を修正し、４区画に設定した。すなわち、南西部、北西部、中央部、東部である。この区画は近年になりガリシア語研究所（サンディアゴ・デ・コンポステーラ大学）によるＡＬＧａ『ガリシア言語地図集』の作成にともない、フェルナンデス・レイ（1982)が現代ガリシア語を３つの言語ブロックに定めた。この三大ブロック内にはそれぞれ異なる言語的特徴を示す地理的に小地域を限定している。この区画は、音韻・形態的特徴を考慮に入れたもので現在のガリシア語を次のように示すことができる。

A　西部ブロック　1）フィステラー地域（①北部②南部）
　　2）中間地帯（①サルネース、②モラーソ・フラゴソ）
　　3）トゥイ地域（バイショ・ミーニョ地域を含む）

B　中央ブロック　1）ミンドニェンセ地域（①西部②東部）
　　2）ルーゴ・オレンセ地域（①北部②南部）
　　3）リミア・バイショ地域

C　東部ブロック　1）アストゥリアアス地域

2）アンカレス地域
3）サモーラ地域

1．二人称主格代名詞ｔｉ／ｔｕについて

主格代名詞ｔｉの語形は、ガリシア西部地域のことばに現れる事実で、とくに、ルーゴ県の中央部へと進行している。ガリシア中央部、東部、西部の小地域（バィショ・ミーニョ）では語源上のｔｕ（<lat.tū）があらわれている。ルーゴ・オレンセ地域とバイショ・ミーニョ地域では、tuが主格、tiが前置詞格として現れる。

Eu son María, chamo desde Madrid, ¿e ti quen es?

（マリアです、マドリッドから電話していますが、誰ですか。）

人称代名詞ｔｕは地理的にかなり広い範囲にあらわれる語形で、ラテン語からの形態をもっともよく温存し、ポルトガル語との調和にもとづくものであるので、人称代名詞のパラダイムの中に交替可能な語形として示し、ｔｉ／ｔｕの交替を認めるべきであると考える。*Normas*[(3)]においてｔｉだけの語形を採る理由は、ガリシアの大部分の地域で書きことばに用いられている語形であるということによっている。ガリシアの作家たちは（ｔｕの地域出身も同様）ｔｕの語形をスペイン語主義的傾向と考え、ｔｉをガリシア語の示差的特徴として用いている。この判断の論理にしたがうと、作家たちは主に西部出身者が多いで、東部地域の語形にたいして西部地域のあらゆる形態を好んで使う傾向が生じてくる。最後に、ｔｉの語形は話しことばにおいて一部の地域ではｔｕの語形を押しやっている。この侵入が現在、未来において激しく統行するとは考えられないであろう。

2．二人称弱形代名詞ｔｅとｃｈｅについて

ガリシア語には二人称弱形代名詞の与格ｃｈｅと対格ｔｅがある。一般には、ｔｅは動詞の表現する行為が直接に人間にかかわる時に用いられ、ｃｈｅは動詞の表現する行為が間接的に何らかの手段で人間にかかわる時に用いられる。

Deiche o libro.（私は君に本をあげた。）Non che deu o libro.（彼は君に本をあげなかった。）¿Que tal che vai?（ごきげんいかが）¿Que che pasa?（君はどうかしたの。）Non che gustaría facer iso.（君はそれをしたくないのでしょう。）Teño que levarche as cousas.（私は君に忠告しなければならない。）Escribinche(＊escribinte)unha carta.（私は君に手紙を書いた。）Xoán, vi nte na rua.（ショアン、昨日通りで君を見かけたよ。）Teu irmáo lévate ó colexio.（君の兄が君を学校に連れていく。）Animoute moito, sen éxito.（成功しなかったので、彼は君を元気づけた。）

また、再帰動詞においてもｔｅが用いられる。

Ti non te imitas a Xoán.（君はショアンに似ていない。）¿Levácheste as mans?（君は手を洗ってか。）Lávaste(＊Lávasche)a cara.（君は顔を洗う。）Quéixaste por noda.（君はなんでもないことで不平を言う。）

だが、コルーニャ県西部ではｃｈｅが対格と与格の両方に使われている。それをｃｈｅｉｓｍｏと呼んでいる。

Deiche o libro.（与格：私は君に本をあげた。）Vinche onte na rua.（対格：昨日、通りで君を

見かけた。）

一方、ガリシア西部のポンテベドラ県バイショ・ミーニョ地域、オレンセ県東端、サモーラのガリシア語地域では、ｔｅが与格と対格の両方に使われる。これをｔｅｉｓｍｏと呼んでいる。

Deite o libro.（与格：私は君に本をあげた。）Vinte onte na rua.（対格：昨日、私は通りで君を見かけた。）Díxete un segredo.（与格：私は君に秘密を言った。）

ところで、ロマンス語のなかでガリシア語にのみ認められる dativo de solidariedade（又は pronome de solidariedade）と呼ばれる実に興味深い与格代名詞の現象がある。これは、ラテン語にも datiuus ethicus「倫理的与格」、datiuus sympatheticus「共感の与格」と呼ばれるものがあり、部分的にはガリシア語のそれと重なるものであるが、その意味範囲はきわめて広く根深い。

tolle mihi ē causā nōmen Catōnis. Catōnis Cicero, Oratio pro Murena. 67.

（この件からカトーの名を除いてみてほしい。）Collart, J.：*Gammaire du latin.* p.109.

日本語では逆に相手の注意をうながす意味で「それが、あなた、ひどいんですょ。」という文に表れている。

この「連帯的与格」は、とくに口語ガリシア語において動詞によって表現される行為に話し手が心情的に特別な親近感を抱かせ聞き手を話のなかに参加させたいときに用いる二人称弱形代名詞を言う。形式は次のように表すことができる。

	対話者（単数）	対話者（複数）
親称	ｃｈｅ	ｖｏｓ
敬称	ｌｌｅ	ｌｌｅｓ

Estache moi bonita esa película.（その映画は、君、じつにいいよ。）

Non che estou ben.（君ね、具合がよくなくて。）

É vos unha historia de amor.（君たちね、これが愛情物語です。）

Estalle moi caro o peixe, señor.（魚が、あなた、たいへん高いんですよ。）

また、ガリシアの人びとの話すスペイン語にもこれが特徴となって表れてる。No te está en casa. Aquí te llueve mucho. Juan no le está. Estes rapaces te son el diablo.（García González, Constantino：*Temas lingüística galega*.p.123.）

3．主格人称代名詞 nós/nosoutros と vós/vosoutros について

主格代名詞複数形は第一人称ｎｏｓと第二人称ｖｏｓが人口的・地理的にも大多数をしめている。ただ、ｎ ọ ｓ，ｖ ọ ｓ［ọ閉母音］はガリシア東部のことばの特徴で、ｎ ọ ｓ，ｖ ọ ｓ［ọ開母音］は所有詞ｎ ọ ｓｏ，ｖ ọ ｓｏからの類推による形態で他のガリシアの地域で現れている。一方、コルーニャ県北東部、ルーゴ県北部とアストゥリアスの地域では nosoutros（異形として nusoutros, nesoutros）と vosoutros（異形として vusoutros, vasoutros）が現れている。ポンテベドラ県の一部とコルーニャ県の西部では nosoutros/nós と vosoutros/vós が併存している。しかし、コルーニャ県西部のことばには nosoutros が除外的第一人称複数形、vosoutros が除外的第二人称複数形、nós が包括的第一人称

複数形、vós が包括的第二人称複数形として用いられる。nós, vós は男性・女性形共通であるが、nos outros, vosoutros は男性形で、nosoutras, vosoutras は女性形である。

Nós non fomos. （我々［私とあなた］は行かなかった。）

Nosoutros imos mercar e vosoutros limpáde-la casa.

（私たち［あなたを除外し、あなたに対する私と他の人］は買物に行き、君たちは家の掃除をした。）

Vós quedaste na casa. （あなたたち［彼や彼らに対立するあなたとあなた］は家にいなさい。）

En canto nosoutros [=os da miña familia, os do meu barrio] traballamos a eito, os máis andan fogar.

（私たち［私の家族、私の住んでいる土地の人たち］は引き続き働くが、多くの者は怠け始める。）

ただし、［　］はコルーニャ県西部のことばの意味。

4．敬称のｖｏｓの用法

アルカイックな待遇表現のｖｏｓは単数にも複数にも用いられ、現代の vostede（二人称単数形の尊称）、vostedes（複数形）にあたる。Vostede, vostedes はガリシア語におけるスペイン語主義であり、ガリシアでは19世紀頃から文献に現れている。Vós tendes［ter の２人称複数形］の用法はコルーニャ県西部で主語として vós が、とくに教父母のあいだで、親密な又は近隣の者同志の待遇表現に用いられ、年令層によって特別な尊称に値する。二人称の親称 ti にたいして尊称の vostede, vosté は明らかにスペイン語からのものである。古い形の vossa mercê から -t- と -d- が現れた。Vostede の起源はスペイン語の古い形 vu(e)st(ra merc)de から進展した vusted からであり、弱母音 u はガリシア語で開母音 o となった。口語では osté の語形も現れている。

…, e vós, mestre Flute, podedes pór a vosa espada no alarde, …

（フルテ先生、点呼の際、帯刀してください）

Vostede moito fala［falar の３人称単数形］.（あなたはよく話す。）

Manuela, ¿e vós onde ides［ir の２人称複数形］？（マヌエラ、どちらにお出かけ。）

¿Estades cómoda, madriña？（親称：おかあちゃん、楽をしていますか。）

対話者が複数のとき生じる誤用は、親称形に関して差異が存在しないので注意を要する。

5．第三人称弱形代名詞の形態

	与格	対　格
男性形	ｌｌｅ	ｏ（ｏｓ），- ｌｏ（- ｌｏｓ），- ｎｏ（- ｎｏｓ）
女性形	（ｌｌｅｓ）	ａ（ａｓ），- ｌａ（- ｌａｓ），- ｎａ（- ｎａｓ）

（　）は複数形

5．1　与格ｌｌｅはガリシアでは一般に次のように現れる。

Collinlle o libro.（私は彼に本を見つけた。）

Xa lle dixeron iso.（すでに彼らはあなたにそれを言った。）

しかし、リアス・アロサ、ポンテベドラ県南部、コルーニャ県北東部、ルーゴ県北部とガリシア地方東部に散在して、ñe（ñeismo）が鼻音のあとに現れている。

Dixéroñe.（彼らはあなたに言った。）No ño queiras.（彼を好きになるな。）

与格は肯定文では enclitic（前接語）であるが、否定辞などの副詞が先行する時は、動詞の前にあらわれる。[4]

Pegouñe.（彼はあなたを殴った。）

Xa ño dixen.（すでに私は彼に言った。）

Nunca ño vira.（いちども彼に会ったことがなかった。）

ALGaの調査資料から Festiñás（Cambados）地方のことばに次の例を見いだすことができる。

; e claro, na primeira casa qu' encontraron xa ñe diron.

（彼らが出会った最初の家で、すでに彼らは同僚［彼］に差しだした。）

¿Queredes unha copa? E Díronñe caña...

（一杯どうですか。それから彼らは同僚［彼］に焼酎をだした。）

5．2　また、第三人称弱形代名詞は第二人称の尊称の形式に用いられる。

Que non lle parezca mal, señor, pero non o avisei porque pensei que a vostede non lle interesaba.

（あなたに興味がないと思ったので知らせなかったが、気を悪くしないように。）

5．3　与格の複数形は lles であるが、単数形と複数形を区別しないで複数形にも lle を使う地域がかなりある。Conteille un conto ós amigos.（友人たちに話を聞かせた。）

与格＋対格が結合するばあい、lles-lo(s), lles-la(s)の形式がルーゴ県全域、コルーニャ県東部の半分、アストゥリアスのガリシア語地域に現れる。レオン県の一部では Déilelo a teus pais.（私は君の両親にそれをあげた。）である。ガリシアの他の地域では与格は数の区別がない。例：deillo(lle＋o) a teu pai, deillo(lles＋o) a tues pais. llelo(lles＋o) の地帯以外では、普通 lle/lles の対立が存在せず、単数に中和する。

5．4　対格について

対格 o の形式は動詞または与格との組み合わせによって、第2形式（-lo, -la）と第3形式（-no, -na）がある。中世ガリシア語では二重母音に続く代名詞は o（a；os, as）であったが、後に第3形式が発現し、現用されている。

5．4．1　第2形式

a）　動詞の形態が -r または -s でおわり、前接するばあい。

Sabíalo ben.（sabías＋o）（彼をよく知っていた。）

Quixeron matalo.（matar＋o）（彼らは彼を殺したかった。）

b）　与格 nos, vos, lles＋対格 o のばあい。

Non nolo digas.（私たちにそれを言うな。）

Contóuvoslo todo.（彼は君たちにそれをすっかり話した。）

Non lleo quixo dar.（彼はあなたたちにそれをあげたくなかった。）

c）　疑問の副詞 u（<lat. ubi）のあとで。

O diñeiro, ¿ulo？（お金、それはどこ。）

5．4．3　第3形式

a）　二重母音で終わる動詞のあとで。

Colleuno por un brazo e botouno para fóra.

（彼はそれを腕でつかんで、外になげた。）

b）　複数形第3人称の動詞-nでおわる形態のあとで。

このばあい単に代名詞のnを記すという理由で、動詞の語尾-nがおちる。Colléronos por un brazo e botáronos á rúa.（彼らは私たちを腕でつかまえて、通りに投げだした。）

しかし、動詞の語尾-nは、代名詞n o sが前接する時には保存される。

Entregáronos<entregaron+nos（彼らは君たちに渡した）と

entregáronnos<entregaron+nos（彼らは私たちに渡した）を区別するためである。

5．4．4　方言として見たばあい。

1）アストゥリアス(イビアスを除く)とルーゴ県のネグエイラ・デ・ムニースでは代名詞はいかなる環境でもlo(s), la(s)である。例：xa lo ves（いずれ君はそれがわかる），síntolo（私はそれがわかる），atópaslo（君はそれを見つける），atópalo（彼はそれを見つける），quérelo（彼はそれがほしい），colléronlo（彼らはそれをつかんだ），deixoulo（彼はそれを放した。）

2）イビアスとアンカーレスの地域では代名詞はo(s), a(s)であるが、男性形単数は母音のあとでl/elをあらわす。例：dil(dio)(彼はそれを言った），víel(vino)(私はそれを見た）。二重母音-iuのあとで、viul(viuno)(彼はそれを見た），女性形のばあいはviua/viula(viuna)。二重母音-ouのあとで、deixóul/deixóuel(deixouno), deixouna(deixouna)。ルーゴ県東部の口語の特徴はmírol(míroo)（私はそれを見る），díol(dío), fíxol(fíxoo)（彼はそれをした）のようにアストウリアスのことばに近い。アストゥリアスのガリシア語はdeixouloである。

3）二重母音でおわる動詞の形態に続く代名詞o(s), a(s)は第3形式が用いられpartiuno（彼はそれを分けた），deixouno, canteino（私はそれを歌った）が共通であるが、ガリシア東部、リミア・バイシャ、ポンテベドラ県南部、コルーニャ県西部ではpartiuo, deixouo, canteioのようであり-noの形態は現れない。分布はpartiuo, deixouoの方がseio（私はそれを知っている），canteioより広い。

4）コルーニャ県北東部、ルーゴ県北部に散在する二重母音でおわる動詞の語尾に続く-o, -aが-iになる現象。例：síntoo → síntoi, síntao → síntoi, síntaa → sintai

5）動詞の語尾-nに続く-loは同化し-nn>nになる。

例：colléronlo>colléronno>collérono. コルーニャ県とポンテベドラ県西部、ルーゴ県東部に散在してcolléronno, fanno（彼らはそれをする）が現れる。最初のnは軟口蓋音である。

（註）

（1）ILG-RAG(Instituto Lingua Galega e Real Academia Galega, サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語研究所とガリシア・アカデミー）による表記、形態の統一に関する決議（1982. 7．3）。

（2） ラテン語から進展したガリシア語の形態（註）

（1） ILG-RAG(Instituto Lingua Galega e Real Academia Galega, サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語研究所とガリシア・アカデミー）による表記、形態の統一に関する決議（1982. 7. 3）。

（2） ラテン語から進展したガリシア語の形態

体系 / ラテン語	A	B	C	D	E	F
-ŭlt- multum	moito	muito	muito	muito	muto	muito
-ŭct- luctum	loita	luita	luita	luita	luta	lutia
-ŏct- noctem	noite	nuite	noite	noite	noite	noite
-ŏri- corium	coiro	cuiro	coiro	couro	coiro	coiro

Aの体系はすべてoiでガリシアの大部分、Bはコルーニャ地方、Dはポンテベドラ地方南部、他はガリシア東部の特徴である。

（3） ILG e RAG：*Normas ortográficas e morfológicas do idioma galego.* Vigo. 1982.

（4） 拙稿「再帰代名詞seを伴う人称不定詞」ロマンス語研究 19. (1986). p. 7 ff.

参考文献

浅香武和（1988），「ガリシア語の言語地理学的考察」麻布大教養部研究紀要 21. pp.41－50.

AGAL(Associaçom Galega da Lingua)(1983), *Estudo Critico.* A Corunha.

Álvarez Blanco, Ma. R. *(1982), "O pronome persoal." Homenaje a Álvaro Cunqueiro. Universidade de Santiago de Compostela. pp.246－266.*

Álvarez, R. et al. (*1986*) , *Gramática galega.* Vigo, Editorial Galaxia.

Fernández Rei, F.(1982),"Bloques e áreas lingüísticas do galego moderno."*Grial 77.* pp.257－296.

Fernández Rei, F.(1977), "Notas lingüísticas sobre Fefiñáns Combados ." Homenaje a Cabanillas. Universidade de Santiago. pp.287－325.

Fernández Rei, F.et al.(1985),*Lingua galega.* Vigo. edicións xerais.

Porto Dapena, J.A.(1977),*El galleo hablado en la comarca ferrolana.* Verba, Anejo 9.

Saco e Arce, J.A.(1869),*Gramática gallega.* Lugo. Reimpresión,1967.Orense.

Voz de Galicia (ed.)(1986),*Galego coloquial.* La Coruña.

Edicións Xerais de Galicia(1986),*Diccionario Xerais da Lingua.* Vigo.